

令和 4 年 6 月 19 日現在

機関番号：13801

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2021

課題番号：19K01055

研究課題名(和文) 聖人崇敬の表象から読み解く中世君主の政治的課題と統治理念：カール4世を事例として

研究課題名(英文) The political issues and ideas of the medieval monarch from the representation of veneration

研究代表者

藤井 真生 (Fujii, Masao)

静岡大学・人文社会科学部・教授

研究者番号：70531755

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：ルクセンブルク家カール4世を事例として、中世君主の聖人崇敬から政治的課題、統治理念、信仰世界の解明を試みた。年代記に記録されたカールの聖遺物収集の傾向から彼の意図を考察し、併せてカルルシュテイン城の聖十字架礼拝堂の壁画群における聖人君主の選択理由を分析した。彼が、壁画の中心に置いたカール大帝に自らに準えつつ、イングランドや北欧、ハンガリー、アルルなどの聖人君主を配置し、チェコ及び帝国を中心とした東西南北世界に君臨するイメージを描いていたと結論した。また、そうしたカールの聖人崇敬に伴う諸々の行為が、当該領邦の支配階層を構成する貴族や聖職者の政治的活動に与えた影響を、前王朝と比較しつつ検討した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

中世ヨーロッパの君主の政治的課題や統治理念を、方法論的には、近年の美術史研究の成果を取り込みつつ、宮廷儀礼空間を装飾する聖人画群から検討したこと、その成果として、年代記などの叙述史料には記録されづらい君主の世界観(天上に準えた地上世界)および、その中での自身の位置づけ(地上世界の中心に君臨する皇帝像)を明らかにしたこと、その2点に学術的な意義がある。

研究成果の概要(英文)：Taking the Luxembourg family Car IV as an example, I tried to elucidate political issues, governing ideas, and the world of faith from the worship of saints of the medieval monarch. I considered his intentions in view of Karl's tendency to collect relics recorded in the chronicles, and also analyzed the reasons for the selection of the saint monarch in the murals of the Oratory of the Holy Cross in Karlstejn Castle. He placed the saint monarchs of England, Scandinavia, Hungary, Arles, etc. in the same way as Charlemagne, who placed it in the center of the mural painting, and drew the image of reigning in the north, south, east and west world centered on the Czech kingdom and the empire. I concluded that. In addition, the effects of various acts associated with the reverence of saints by Karl on the political activities of the aristocrats and clergy who make up the ruling class of the territorial state were examined in comparison with the previous dynasty.

研究分野：ヨーロッパ中世史

キーワード：中世君主 チェコ 聖人崇敬

1. 研究開始当初の背景

中世ヨーロッパの国王が身に聖性を帯びることやその政治的意味に関しては、周知のように、ブロック『王の奇跡』(1924)やカントロヴィッチ『王の二つの身体』(1957)が、現在でもなお研究の出発点となっている。また、国王と聖人の関わりについては、G. Klaniczay, *Holy Rulers and blessed Princesses*, 2002により、王朝が自らの家系に属する聖人への崇敬を宣伝・利用すること、またその像の描き方が時代によって変遷することなどが、とくにキリスト教世界の周縁部に関して明らかにされている。

一方、中世ドイツにおける領邦宮廷の研究は、H. Patzeによる統合的な研究“Die Bildung der landesherrlichen Residenzen im Reich während des 14. Jahrhunderts“, 1972を起点とし、P. Moraw, *Deutscher Königshof, Hoftag und Reichstag im späteren Mittelalter*, 2002や、W. Paravicini, *Höfe und Residenzen im spätmittelalterlichen Reich*, 2003-12などの共同研究を生み出した。加えて、近年の中世史研究の一つのトレンドとして、G. Althoff, *Die Macht der Rituale*, 2003の紛争研究を典型とする、象徴と儀礼への注目が挙げられる。その視角は宮廷研究にも導入されるようになった。宮廷の儀礼に関しては、我が国でも中世のフランスを事例として、渡辺節夫「ヨーロッパにおける国王祭祀と聖性」(1998)などの成果を得ているが、その後、池上俊一が『儀礼と象徴の中世』(2008)で中世社会全体における儀礼の機能を適切にまとめている。こうした動向に伴い、国王の三儀礼(成聖式、入市式、葬送儀礼)に関する研究が各時代、各地域を対象として進められるようになり、報告者も国王戴冠式については分析を試みたことがある。

そうした儀礼を通じて聖性が獲得され、発揮される場/空間が宮廷なのである。ここに聖人、宮廷、儀礼研究の接点が見出される。

ところで、Klaniczay、あるいはその影響下に進められてきた聖人研究は、王朝とその所縁の聖人が対象とされてきた。フランス王家と聖ドニの関係については、G. Spiegel, “The cult of St Denis and Capetian kingship”, 1983とその成果を整理した江川温「民族意識の発展」(1995)の研究があり、チェコ王家と聖ヴァーツラフについては、報告者がF. Graus, “St. Adalbert und St. Wenzel”, 1980を援用して研究を進めた。しかし、君主は特定の聖人だけを崇敬するのではなく、また家門から聖人を生み出していない君主も、当然、聖人を崇敬し、彼に奉献した教会や礼拝堂を建設する。あるいは聖遺物を収集するのである。また、君主の政治的課題は、王朝ないし家門の正当化のみではない。であるならば、君主の聖人崇敬とその表象の理解を「家門出身の聖人との結びつきの強調による家門の正当化」との段階に留めておくことは、研究の新たな可能性に目をつむることを意味する。聖人崇敬とその表象の分析は、君主のアクチュアルな政治的課題のみならず、統治理念や信仰世界をも垣間見ることができ、非常に有効な視点になると思われる。本研究の根幹となる問いは、君主は宮廷儀礼空間を装飾する際に聖人崇敬をどのように持ち込むのか、またその選択の背景にはどのような政治的課題、統治理念が存在するのだろうか、という点にある。

なお、ル・ゴフは『聖王ルイ』(1996)で君主像とその表象にまで考察の範囲を広げているが、こうした作業は文字史料のみでは成し得ず、造形芸術などの資料活用が必須のものであることを示している。伝統的な文字史料に限定せず、宮廷/居城や礼拝堂を飾る聖人画なども積極的に分析の手段として活用することが求められる。

2. 研究の目的

14世紀に「金印勅書」を發布した皇帝兼チェコ王カール4世は、ルイ9世やフリードリヒ2世に匹敵する、すぐれた統治実績と豊富な史資料を残した君主である。彼の政治課題、統治理念や信仰世界を宮廷儀礼研究、聖人崇敬研究の視点を導入して明らかにすることが目的となる。こうした志向は上述の研究動向に棹差すものだが、美術史との協働を進める点において独自性をもつ。その点を明確にするために、ここではカール4世研究に絞って記述する。

カール4世に関するドイツ及びチェコの史学界における研究蓄積は厚く、比較的オーソドックスに政治的、文化的事績を検討したF. Seibt, *Kaiser IV., Ein Kaiser in Europe 1346 bis 1378*, 1978, J. Spěváček, *Karel IV.*, 1979から、プラハ改造に注目したP. Moraw, “Zur Mittelpunktfunktion Prags im Zeitalter Karls IV.”, 1980、宮廷に着目したF. Kavka, *Am Hofe Karls IV.*, 1989、さらに宮廷儀礼を対象に入れたL. Bobková, M. Holá (eds.), *Lesk královského majestátu ve středověku*, 2005まで、近年、切り口は次第に広がりつつある。聖人崇敬に関しては「聖ヴァーツラフ伝」の執筆、儀礼では葬送行列、そして領邦宮廷研究においては、領邦集会 *Landestag* や巡行支配 *Itinerar* などに注目が集められてきた。

21世紀に入り、J. Fajt (ed.), *Karel IV. Císař z boří milosti*, 2006のように歴史展覧会をベースにした共同研究、あるいはJ. Kuthan, J. Royt (eds.), *Karel IV.*, 2016等の論集が公刊されたが、いずれも美術史家の業績であり、芸術作品を用いた歴史学からのアプローチは本格化していない。美術史からは他にも、I. Rosario, *Art and Propaganda: Charles IV of Bohemia, 1346-78*, 2000が著されている。多くの示唆を与えてくれる研究だが、Klaniczayと同じく、王朝所縁の

聖人のみを分析している。そのため、歴史学の専門家による、国王と聖人の関係の全体像を、図像表象を利用しつつ詳らかにすることが喫緊の課題となっている。聖人崇敬に関しては、J. Kubín が Svatý Václav, 2010 及び Sedm přemyslovských kultů, 2011 を著したが、やはり王朝固有の聖人にのみ焦点をあてている。

絵画史・建築史などの成果の公刊が進む現在、図像学的表現・空間的配置を分析する環境が整いつつあり、図像学を援用した歴史研究もこれから本格化していくことが予測される。報告者は、フサ『中世仕事図絵』の翻訳作業(2017)などを通じて、中世チェコの図像資料に関する知識を深めてきた。その強みを生かして、図像学的視点も導入することにより、従来の文字史料重視型とは異なる分析を進めることを目的とする。

3. 研究の方法

上記のような先行研究の整理を経て、本研究の具体的な作業課題は以下のようになる。

カール4世の聖人崇敬

王朝所縁の聖人以外に、カール4世がどのような聖人を崇敬し、利用していたのかを、年代記や証書に見られる聖遺物収集や教会奉獻に関する叙述などから分析し、関係する聖人のリストを作成する。次いで、各聖人の属性を整理する(何の守護聖人なのか、どのような美徳を表象しているのか)。さらに、儀礼の舞台となる大聖堂や居城の壁画や祭壇画などにおける、聖人の表現方法を分析する(誰がどのように描かれているのか)。

カール4世の政治的課題とその変遷、統治理念

先行研究を参照しつつ、カール4世の政治的課題を明らかにする。その際、巡行支配 Itinerar 研究の成果を基に、政治的影響力の空間的な広がりとその変遷も調査する。聖人が特定の地域の守護聖人として表象されることが多いためである。また、彼の『自伝』や『国王戴冠式次第』から、重視している君主としての徳目を析出する。

これを年度ごとの計画として示すと以下のようになる。

- ・平成31年度：カール4世期の証書史料集を悉皆調査し、彼の治世における教会奉獻記録をリストアップする。さらにこのデータを、年代記に見られる聖遺物収集記事と、チェコにおける教会奉獻傾向と照合し、彼が崇敬した聖人を把握する。また、資料調査を兼ねてチェコを訪問し、チェコ歴史研究所では、留学時代の指導教員であるジェムリチカ教授及びドゥヴォジャーチコヴァー＝マラー博士から、また静岡大学の提携校であるマサリク大学では、リボル教授及びヴィホダ教授から、最新の研究動向と研究計画について助言をもらう。

- ・平成32年度：1年目に調査した証書史料類からカール4世の政治的動向に関する情報を整理する。巡行支配に関する先行研究は多いが、聖人崇敬との関連から政治的課題やその変遷を捉えなおす。加えて、リスト化した聖人の属性を調査しつつ、カールの『自伝』に表現される君主としての理念を分析する。両者を対比することにより、彼の統治理念が聖人崇敬の形を借りてどのように表出したのかを考察する。学会、研究会などで中間報告を行う。

- ・平成33年度：聖十字架礼拝堂を中心にプラハ城、地方王宮の壁画などの現地調査を行う。聖十字架礼拝堂描かれた人物のアトリビュート(持物)とともにその空間配置にも留意しながら、聖人崇敬の傾向、統治理念及びアクチュアルな政治的課題を読み解く。

以上の研究成果をまとめ、学術誌に投稿するための執筆を行う

4. 研究成果

ルクセンブルク家カール4世を事例として、中世君主の聖人崇敬を通じて政治的課題、統治理念、信仰世界の解明を試みた。具体的には、年代記に記録されたカールの聖遺物収集の傾向からみた彼の意図を考察し、あわせてカルルシュテイン城の聖十字架礼拝堂の壁画群における聖人君主にさいしての選択理由を分析した。彼が、壁画の中心に置いたカール大帝に自らを準えつつ、イングランドや北欧、ハンガリー、アルルなどの聖人君主を配置し、チェコおよび帝国を中心とした東西南北世界に君臨するイメージを描いていたものと結論した。その成果は、「聖人に囲まれた国王——ルクセンブルク朝カレル四世と聖十字架礼拝堂の聖人画群」高田京比子・田中俊之・轟木広太郎・中村敦子・小林功編『中近世ヨーロッパ史のフロンティア』昭和堂、2021年、215-242頁として公表した。

また、そうしたカールの聖人崇敬にともなう諸々の行為が、当該領邦(ここではチェコ)の支配階層を構成する貴族や聖職者の政治的活動に与えた影響を、前王朝のそれと比較しつつ検討した。具体的な作業としては、証書史料から集会の開催日を網羅的に抽出し、聖人の祝日との関連性を示した。その結果、カールの宮廷サークルでは彼の意図が共有されていたものの、政治集会にまで影響を及ぼしていなかったことが判明した。その過程で、2021年11月3日の西洋史読書会大会(京都大学)において「王朝の聖人、領邦の聖人」と題して報告した。コロナ禍が解消したのちには、カールの息子ヴァーツラフ4世時代の史料調査をさらにすすめたうえで、この成果もいずれ学会誌に投稿する予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 藤井真生
2. 発表標題 王朝の聖人、領邦の聖人
3. 学会等名 西洋史読書会大会（京都大学）
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 高田京比子、田中俊之、轟木広太郎、中村敦子、小林功（編）	4. 発行年 2021年
2. 出版社 昭和堂	5. 総ページ数 488
3. 書名 中近世ヨーロッパ史のフロンティア（第 部第10章担当）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------